

第36空輸中隊 サムライ即応監査で即時戦闘展開能力を実践 *The 36th Airlift Squadron demonstrates Agile Combat Employment capabilities during Samurai Readiness Inspection*

May 17, 2021

By Airman 1st Class Tyrone Thomas
374th Airlift Wing Public Affairs

嘉手納基地発—横田基地第36空輸中隊の乗員たちは5月2日、三沢基地と嘉手納基地へ飛び、横田基地のサムライ即応監査(SRI)で重要な即時戦闘展開(ACE)を実践した。

サムライ即応監査は、シミュレーションされた戦時や有事の一連のシナリオに基づいてチーム横田の能力を評価する、毎年恒例の訓練である。

即時戦闘展開では、日本全土の基地間の相互運用性を集結し、さまざまな環境下で任務を遂行するための新しい方法を実践する。

今回の基地間の作戦で横田基地第36空輸中隊は、まず三沢基地に飛び、空兵と機材を乗せて嘉手納基地に向かい、共同訓練を行った。第36空輸中隊は、C-130Jスーパーハーキュリーズを島の荒れた地形の着陸帯に着陸させ、三沢基地は第36空輸中隊が嘉手納に向かう際に離陸し、訓練後に帰還するための重要な拠点となった。

第36空輸中隊C-130Jパイロットのブリアナ・パウザー大尉は、「C-130は、3,000フィートの低さから着陸できるようにできており、着陸帯の訓練は最も厳しい環境を想定して行った。滑走路の端に着陸し、伊江島の地上部隊と連携して統合戦闘ターンを行い、その後来た道をまた飛び立った」と述べた。

第36空輸中隊は、シナリオやミッションに応じて、必要なトラックの荷台、フォークリフト、ハーネスをつけた空兵などを使い、さまざまな積み降ろし方法を実践した。

第36空輸中隊パイロットのヤンジ・ズオ大尉は、「我々の実践方法の一つは、コンバット・オフロード方法の一種だ。重機やフォークリフトを必要とせずに貨物を搬出する」と語る。

他の搬出方法は、C-130の搬入口の下にオイル・バレルを置く方法だ。輸送機がフライトラインで前進すると、嘉手納の空兵が置いたバレルの上に貨物が置かれる仕組みだ。これは横田の飛行機が嘉手納に着陸し、即時積み降ろしが必要になった際に行われる方法である。

第36空輸中隊のパイロット指導官のサラ・ウオフォード少佐は、「相互運用性の道筋を明らかにし、他の基地の運用状況を知り、協力することは重要だ。即時戦闘展開のコンセプトを導入する前は、自分たちの基地からの支援を中心に考えていたが、協力関係を構築することで、太平洋空軍管内の姉妹基地を支援することになった際に、より高い即戦力を確立できることは素晴らしいことだ」と話した。

